

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

令和 7 年10月27日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所 属 部 局 生存圏研究所

職 名 准教授

氏 名 横山 竜宏

助 成 の 種 類	令和 7 年 度 ・ 国際会議開催助成		
国 際 会 議 名	(和文)第10回生存圏アジアリサーチノード国際シンポジウム (英文)The 10th Asia Research Node Symposium on Humanosphere Science		
開 催 期 間	令和 7 年 9 月 16 日 ～ 令和 7 年 9 月 18 日		
開 催 場 所	国立成功大学、台南市、台湾		
参 加 者	総 数 94名	内 訳 国内:38名、海外:56名	
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版1枚程度で作成し、添付して下さい。 「成果の概要」以外に添付する資料 ☒ 無 ☐ 有()		
会 計 報 告	事業に要した経費総額	4,073,163 円	
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円	
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称)台湾国家科学技術評議会(NSTC)研究集会助成費、京都大学生存圏研究所研究活動推進費(運営費)、京都大学生存圏研究所研究集会助成費	
	経 費 の 内 訳 と 助 成 金 の 使 途 に つ い て		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	旅費交通費	3,920,693	1,000,000
	通信運搬費	29,200	0
	消耗品費	37,575	0
	その他	85,695	0
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今回の助成金は、全て学生と若手研究者の旅費として利用致しました。コロナ禍以降、初の本格的な海外開催となったシンポジウムでしたが、今回の助成のおかげで多くの学生の渡航が可能となりました。シンポジウムは成功裏に終了することができました。今後も機会があれば利用させて頂きたいと考えております。		

2025年9月16日から18日にかけて、第10回アジアリサーチノード国際シンポジウム(The 10th Asia Research Node (ARN) Symposium on Humanosphere Science)を開催した。台湾国立成功大学において開催し、日本国内からの参加者38名(うち学生11名)、台湾からの参加者56名と非常に盛況なシンポジウムとなった。また、シンポジウム初日には、台湾国立成功大学計画設計学院および夏漢民宇宙科学技術センターと生存圏研究所の部局間学術交流協定締結式が開催された。

生存圏研究所は、平成28年度から、「生存圏アジアリサーチノード(ARN)」を整備・運営することで、国際共同研究のハブ機能を強化するとともに、生存圏科学を支え、さらに発展させる国際的な人材育成を進め、地球規模で起こる課題の解決に取り組んでいる。今回は10回目の国際シンポジウムであり、コロナ禍以降、初の本格的な海外開催のシンポジウムとなった。

今回は8つのサイエンスセッションと、2つのKeynoteセッションでシンポジウムを構成した。セッション一覧は以下の通りである。Session I. Satellite Payload and Engineering, Session II. Equatorial Aeronomy and Remote Sensing, Session III. Urban Pest and Management, Session IV. Wireless Systems – Semiconductor Devices and Wireless Power Transfer –, Session V. Architecture with Wood – Large-scale Structures with Timber Materials –, Session VI. Biology and Biotechnology for a Sustainable Future, Session VII. Space Science and Space Weather, Session VIII. Advanced Biomass-based Materials。ポスターセッションでは、学生を中心に37件の発表があり、両国間の学生・研究者の交流が促進された。Keynoteセッションでは、日本台湾両国から名誉教授クラスの5名の研究者に行って頂いた。いずれも好評であり、シンポジウムは成功裏に終了した。日本と台湾両国から若手・ベテラン研究者がバランス良く出席し、人的交流が大きく促進されたことは非常に大きな成果であったと言える。

